OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	重建懐徳堂復元模型成る
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	懐徳堂センター報. 2006, 2006, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24413
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

重建懐徳堂復元模型成る

大阪大学大学院文学研究科長
財団法人懐徳堂記念会常務理事　柏木隆雄

太平洋戦争末期、昭和二十年の大阪大空襲で焼失した重建懐徳堂の建物の様子は、いくつかの写真で、その大体の様子をうかがうことができますが、その全容がどうだったのか、空の中に想像することしかできず、隔靴掻痒の感を抱かせるものでした。ところが焼失を免れた書庫の文書類を湯浅教授を中心として調査する過程で、大正五年（一九一六）に建てられた建物の青写真が発見されました。施工は竹中工務店で、平面図、立面図とあります。この図面をもとに復元模型ができないだろうか。湯浅教授とこの計画の橋渡しをしていただいた凸版印刷の方とともに、竹中工務店を訪ねたのは昨年二月一日のことでした。

本城邦彦常務取締役をはじめ、竹中工務店の方々に暖かく迎えていただいたので、いささか心も軽くなって、青写真をお見せし、できればこれをもとに復元模型を作って頂くわけにはいかないだろうか、とまことに厚かましい申し出をいたしました。本城常務は青写真を熱心にご覧になって、設計図が烏口を使って引かれていることなど、感慨深げにおっしゃり、現在竹中工務店もアーカイブ資料館をもって、貴重資料の整理、保存に取り組んでいるが、この大正五年の重建懐徳堂の設計図は見あたらない。確かに興味深い資料で、「こういうものが出てきたからには、竹中工務店としても、ご依頼をお断りするわけにもいかないですなぁ」と破顔一笑。私どももほっとして、これなら無理を聞いて頂けるのではないか、嬉しい気持ちを抑え切れませんでした。一応役員会の了承を取らないといけないので、ということでしたが、三ヶ月後の五月十三日、再び竹中工務店を訪れた時、本城常務より五十分の一の模型を作って寄贈していただくことが決定した旨お知らせ受けました。まことに有り難いお計らいで、湯浅教授ともどもお礼申し上げた次第です。

じつはその前に宮原総長とお会いした際、文学研究科に重建懐徳堂の復元模型を竹中工務店のご厚意で作成していただけるかも知れない、とお話しており、総長も四月の入学式、三月の卒業式でも極めて力を込めて懐徳堂の事績と、阪大との深い関係などをお話なさっていることもあって、もしそうなれば、じつに結構なことだと喜んでおられたので、またしても厚顔の本性が出て、せっかく模型を作っていただくのなら、できれば総長室にもう少し小さいサイズのものを置くようにはできまいか。また研究成果の一般への開示や共同研究の拠点を目的の一つとした阪大中之島センターの玄関ロビーにも同じような模型を設置してあれば、どれだけ多くの人の目に触れて懐徳堂の活動が広く知られることか。つまり文学研究科に一つ、さらに小さいサイズのものを総長室、阪大中之島センターにも一つずつ作って頂けると大変ありがたいのだが、と申し出てしまったのです。さすが

の常務も呆れられたことでしょう。けれどもこの厚顔無恥な申し出も結局快く（？）受け入れて頂いて、設置する台やその他模型を作る上での資料関係についての費用は大阪大学文学研究科と懐徳堂記念会が負うということで、いよいよ復元模型ができあがることになりました。

竹中工務店の意向を受けて制作した三浦模型の社長自らが五十分の一、百分の一の重建懐徳堂の模型を研究科長室に搬入された昨年十月五日の感動は、なまなかの文章では表現できません。まだ完全には完成していないとされながら、取り出された模型は実に堂々として、まるで本願寺の大講堂のような趣がありました。白いコンクリートの書庫もあり、小さい方の模型には人力車と車夫、荷車と荷車引きが小さくはありながら、盤石の存在感をもって門前の往来に行き交う姿のままに据えられています。また玄関前には袴姿の書生でしょうか、先生でしょうか、何人かが談笑している姿もあります。私は冗談にこの書生さんの顔を私の顔に描いていただけませんかねぇ、などと相変わらず馬鹿なことを申したりして、そこにいた関係の方々の失笑を買いました。これらの人形は縮小の割合を形として示すことで、建物の実在感をはっきりと感得できるようにと据えられるものだそうです。

復元模型の授与式は、その六日後の二〇〇五年十月十一日午後一時半から文法経本館中庭会議室で行われました。寄贈者である竹中工務店からは山原一晃取締役副社長、本城邦彦常務取締役、野田隆史設計課長が、大阪大学からは宮原秀雄総長、鈴木直、仁科一彦両副学長、橋本日出男理事ほか中村仁信図書館長、江口太郎総合博物館長をはじめ各部局長および事務長の多くが列席、また制作にあたられた三浦模型社長　三浦良雄氏、凸版印刷の方々など、さらに懐徳堂記念会運営委員の江連久雄三井住友銀行総務部長、坪井一弘日本生命本店秘書室長、俣野正治ダイキン工業総務部長、戦前の懐徳堂記念会会員であられる荒田利男氏も出席され、文学研究科教員、職員を合わせて六十名ばかりが式典に参加されました。

式典は最初に私が復元模型制作の経緯を述べ、宮原総長と山原副社長にご挨拶いただき、それまで模型のケースを被っていた白い布を取り去って列席の方々にご披露したあと、総長より竹中工務店の山原副社長へ感謝状が手渡されて、無事式典が終わりました。総長のご挨拶で、「大阪はいつも汚い、ケチな町というイメージが一般に強いが、こうした懐徳堂という立派な文化的事業を行い、立派な建物をもつ素晴らしい町であることを外国人にも、他の府県の人々にも誇るのに格好の復元模型である」と強調されたことが印象的でした。また山原副社長も工務店のアーカイブ資料館にも触れられ、こうした貴重な懐徳堂の建物を復元模型として制作できたことを喜んでおられると挨拶されました。

式典のあと、簡単なレセプションを行い、それぞれに重建懐徳堂の復元模型の意義を語り合って散会いたしました。その日以来、文学研究科玄関中央に堂々と五十分の一の復元模型が鎮座し、その傍らの壁に新しく凸版印刷のデザインによる懐徳堂と大阪大学文学研究科との歴史を一望出来る大型パネル三枚がかかり、講義に出る学生たちの目に触れることになりました。江戸時代の開講から百八十年、重建懐徳堂から大阪大学文学部に移管されてからすでに五十年以上の歴史が、こうして立体的な形で私たちに迫ってくる効果は、耳で聞く話以上の力を持つようにも思います。今回の復元模型の制作に関係されたすべての方のご努力とご高配に感謝して、復元模型の文学研究科設置の報告を終えたいと思います。